

## 効果的な「コミュニケーション論」の授業を求めて

山本 捷子

### Evaluating Innovation in Teaching and Learning of “Communication Theory and Skills”

Shoko YAMAMOTO

**要旨：**この研究は、本学の看護学科一年生のはじめに行った看護学の基礎科目として「コミュニケーション論」の授業評価を述べたものである。「コミュニケーション論」は、看護学の専門基礎科目に位置づけられ、看護技術学習への基礎とする。

教授学習計画には、講義と演習を組み合わせた。その方法は学生にとって楽しく理解しやすく、興味深いものとなり、演習（実際の体験学習）を取り入れたことは効果があったと評価できる。しかし、内容はもっと精選すべきであり、時期や他の科目との関連を密にすることによってもっと効果が上がるだろうと思われる。

**キーワード：**授業研究、コミュニケーション論の授業、コミュニケーションの演習方法

**Summary:** This report is the educational evaluation of “Communication Theory and Skills” for nurse students of first class in Red Cross College of AKITA .

“Communication Theory and Skills” are constructed for the base and motivation of the professional nursing technology,

To produced outcome understandable and interesting for students, the learnig course are mixed the lecture by teacher and several practical methods:speaking with a pair or group, role-play,three minuts speech etc.

In result,this course objectives and desein were effective for students to study deligtfully Communication Theory and Skills.

**Key words:** Educational evaluation ,Communication Theory and Skills, Practical methods of Commnication

#### はじめに

看護学は、人間関係を基盤に展開される実践の科学である。本学の専門基礎科目特論Ⅰの「コミュニケーション論」は看護学の基礎として位置づけられているが、人間関係の基礎であるコミュニケーションのあり方やよいコミュニケーションの方法について学ぶことは、看護のみならず円滑な社会生活を営むために大変意義あることである。

筆者は「コミュニケーション」について以前から関心は持っていたが、看護教育の中で授業を担当したことはなかった。そこで今年度初めて授業を担当するに当たり、学生がコミュニケーションに興味をもち、学習効果も上がるような工夫を試み、研究的な意図をもって授業を展開してみた。

その結果、次回の授業の改善および本学カリキュラムについての若干の示唆を得た。

中村<sup>(1)</sup>は「授業研究のねらいはわかる授業、よい教え方を明らかにすることである」と述べている。言い換えれば学習者の学習内容の修得を促進し、関心や意欲を高める授業作りをしたかどうかをみることである。

そこで本稿では、コミュニケーション論の授業は、学習成果をあげ得たか、学生の参加度すなわち学生が興味関心をもって受講したかどうか、学生の学習意欲／向上目標を喚起したかどうかに焦点を当てながら、授業の展開、授業内容、教材、教師の授業技術の適否に関して評価する。

#### Ⅰ. 授業計画

1. 科目名：看護学科専門基礎科目特論Ⅰ（選択科目）「コミュニケーション論」

2. 実施時期：1年次前期1996年4月23日～6月11日

3. 単位・時間数：1単位15時間（7回）

4. 受講生数：75名

5. 学習目的を次のように設定した。

本授業では、コミュニケーションに関する基礎的知識を学習することによって、望ましいコミュニケーションができるための基盤とする。さらに一人の人間として、自分はどのような人間であるかをみつめ、さらに他者とどのような関係の取り方をする傾向があるかなどを客観的に分析することができ、また学習者として、効果的にグループ学習を進めるための基本を習得する。

6. 学習目標は以下の9項目を設定した。

- ①コミュニケーションの過程、構造を理解する。
- ②人間関係におけるコミュニケーションの意義を理解する。
- ③コミュニケーションにはいろいろなタイプや分類があることを理解する。
- ④よりよいコミュニケーションのためのスキルを理解する。
- ⑤よりよいコミュニケーションのための自己分析及び他者との関係を分析する方法を理解する。
- ⑥アサーティブ・コミュニケーションの意味を理解し、自己訓練の方法を学ぶ。
- ⑦グループ・ダイナミクスの意義とグループ・ダイナミクスを発展させる方法を理解する。
- ⑧言語的コミュニケーションの困難な人とのコミュニケーション手段を知る。
- ⑨専門的援助関係におけるコミュニケーション分析の方法を知る。

7. 評価・単位認定

授業中の参加態度と終了後のレポートにより評価し、単位認定をする。

## II. 授業の実際

学習目標に沿って7回の授業を表1のように計画し実施した。その中で次の点に留意し、工夫した。

1. 授業構成・展開と内容に関して

1) 授業開始時に、授業計画の全体（シラバス）を提示した。

2) 講義内容は一般的なコミュニケーションの基本的理論や交流分析論を用いて、コミュニケーシ

ョンについての基礎的理解をねらった。

3) 構成で工夫したことは、理論的な内容の理解を容易にすること、および「学生の参加」を目指して、講義の前や後に「演習」をとり入れたことである。

まず、1回目に「コミュニケーションの意義」を理解するために、全体の授業計画を説明した直後に、「2人一組の会話」の演習から始めた。与えた課題は、初めはAが思いついたことを話すが、Bは何も答えない。次にBが思いついたことを話すことに對し、Aは頷くか「はい」と答えるのみ。さらにAがある話題を話すことに對し、Bは否定するか、何故？と問い返すのみ。最後にBがある話題を話すことに對し、Aは肯定的あるいは建設的な促しで反応するというものであった。一つの会話は3分間に限定し、終わる度に感想を記録する方法をとった。

4回目のコミュニケーション・スキルの授業では、「効果的な話し方」の実践例として、学生の一人を指名して「3分間スピーチ」をしてもらい、どういう点がよかったか、聴衆の学生の評価とスピーカーの自己評価をさせた。

また「よい聞き方」の講義の後に、「親娘の会話」のロールプレイを参観している教師と学生に実践してもらった。

5回目には、交流分析理論の説明の後に、エゴグラム分析を行った。宿題として、自分の会話を記録し、「やりとりの分析」を課題とした。

7回目の「グループダイナミクスをよりよく働かすための望ましい関わり方」の学習では、自我状態を調節する訓練をねらいとして、「1日を100円で暮らす方法」をテーマに、5人1グループでブレイン・ストーミングをおこなった。これは、「テーマにそって全員が発言してアイデアを出し合い、出されたアイデアに決して批判せず、できるだけ多く出し合う」という課題を与え、終了後グループ毎にアイデアの数を競い合うものであった。

2. 教材に関して

1) 毎回、授業レジメおよび講義内容に関する資料を配布した。

2) 図示して説明する事項については予めOHPを用意した。

3) 毎回、終了時に「コミュニケーションペーパー」を配布し、授業の感想や疑問質問を記入、提

表1 授業展開：授業目標・方法・内容

	授業目標	方法と内容
1 回 目	1) 現在の自分のコミュニケーションの特徴に気づき、 受講への動機を明らかにする 2) 授業の方向付けを明らかにする。 3) コミュニケーションの概念を理解する。 4) コミュニケーションの意義を理解する。	授業計画の説明・授業前調査 演習：「相互交流」 講義：1. コミュニケーションの定義 2. コミュニケーションの過程 3. コミュニケーションの意義
2・3 回 目	コミュニケーション課程の構成要素とそれぞれの要点を 理解する。	講義：コミュニケーションの構成要素 1) 伝える事象 2) 送り手、 3) メッセージ 4) 媒体 5) 受け手 6) フィードバック
4 回 目	人間関係を作る効果的なコミュニケーション・スキルに ついて理解する。	講義：1. コミュニケーション・スキルとは 2. 効果的なコミュニケーション・スキル (その1) 演習：効果的な話し方(3分間スピーチ) 講義：効果的なコミュニケーション・スキル(その2) 演習：よい聞き方 (ロールプレイ「親娘の会話」)
5 回 目	自己を客観的に分析する方法を学ぶ。	講義：自己分析の必要性 演習：エゴグラム分析の実際 講義：交流分析概説 課題提示：「自分の会話の分析」
6 回 目	交流分析の方法を学び、自己の会話を分析し自己の会話 の傾向を知り改善点を考える。	講義：1. 交流分析の方法 2. 気持ちのよいやりとりをするには 3. 専門的援助関係におけるコミュニケーション 演習：「会話における自我状態・やりとりの分析」
7 回 目	グループダイナミックスの意義を理解し、グループダイ スカッションを通してグループダイナミックスのあり方 を学ぶ。	講義：1. 人間生活と集団 2. 集団の特性 3. グループ・ダイナミックスとは 4. グループ・ダイナミックスをよりよく働 かせるための望ましい関わり 演習：グループ討議 テーマ「1日を100円で暮らす方法」 まとめとレポート課題の提示

出させた。疑問質問には次回の授業の冒頭に回答・補足説明をした。

### Ⅲ. 授業研究のための資料の収集方法

#### 1. 授業前調査：

コミュニケーションに関する学生のレディネスを確認し、動機づけを目的として①コミュニケーションについて現在どのように理解しているか、②自分のコミュニケーション傾向や困難な場面について、③授業に何を期待しているかについて、調査した。1時間目に記入、提出させた。

#### 2. 授業後調査：

学生による授業評価のために、授業終了時に行った。

その内容は、①授業内容の理解度について、講義7項目、演習5項目についてそれぞれ5段階評価をしてもらった。②講義7項目、演習5項目から、興味深かった3項目およびさらに学習したい3項目を選択させた。③授業に関する感想：よかった点、改善すべき点。資料や教材について、授業の進め方について、その他、それぞれの項目について自由に感想を記述してもらった。

### 3. 課題レポート:

演習「1日を100円で暮らす方法」の結果から、自分のコミュニケーション傾向について、自由記述させた。

また、授業を受けた結果から、現在自分が「コミュニケーション」についてどのように考えているか、自由に記述させた。

4. 教師の授業技術と授業全体の評価をするために、毎回2台の8ミリビデオで教師と受講生を学生の許可を得て撮影した。しかし、本研究の分析には、VTRは時間の経過を確認するためにのみ使った。

## IV. 授業の結果分析

今回の授業評価の材料としては、授業前調査・課題レポート・授業後調査・「コミュニケーションペーパー」を用いた。

学習目標達成度の評価に関しては、コミュニケーション理論の知識を問うための試験を行わなかったため、認知的到達度の客観的な評価はできない。そこで、レポートの記述内容や授業後調査における学生の主観的ではあるが感想や意見をふまえて評価とする。ただし、今回は統計的処理は行わず、全体的傾向を捉えるのみにした。

### 1. 授業の構成と展開に関する評価

#### 1. 授業の構成について

授業後調査では、授業の進め方については「順序よく組まれている、単元毎のテーマがはっきりしていたので分かりやすく学びやすかった、演習と講義がバランスよく組まれており、リズムカルな進み方で、単調にならず、午後の授業にも拘わらず眠くならなかった」と、全体的に肯定的な意見が多かった。

#### 2. 演習を組み入れたことについて

本授業で最も意識して計画したことは、学生が主体的に参加し、体験的に学び、自己のコミュニケーションの覚醒awarenessをねらいとする授業形態をとることであった。

その結果、授業でよかったこととして37名が「演習」が組まれていたことを挙げており、第1・4・5・7回目に行った「演習」という体験的学習方法は、学生には大変好評であった。

特に第1回目の「2人一組の会話」は、講義に入る前に目的の説明もしないで突然に冒頭に行ったことと、「何も反応しない」や「否定的反応の

み」を意識的に行うことで、学生には強いインパクトを与え、「コミュニケーションは相互作用である」という原則を学ぶことができたようである。

また、最後に行った「1日を100円で暮らす方法」の小グループ討議は、15分間ではあったが、自我状態を意識しながらアイデアを考え出すという知的作業が面白く、印象深い方法であった。また初めて話すクラスメートを知る機会になったなど、副次的効果もあった。

自ら体験する演習は行動を通じた学習方法であり、「講義の内容をイメージするため、分かりやすく理解が深まり、長時間覚えていられる。主体的に参加すること自体が楽しく、飽きることなく退屈しない。午後の授業にも拘わらず眠くならない。講義よりも緊張しない为好い」等が利点として述べられていた。

その分、短時間に限定することでまだ話したりしないという不満感も残り、もっとグループディスカッションを取り入れて欲しいという要求も多かった。さらに演習は緊張感が少ないが、講義は緊張し受け身になってしまうため、つまらなくなったり、よけいに理解困難という感じを抱かせる結果になったようである。これは逆に言えば、講義を一方的にならないように工夫しなければならないということでもある。

### 3. 授業の進度・時間の回数・長さに関して

1単位(15時間)7回の授業を行ったが、ちょうどよい速さであったと記述した者は3名しかなく、大半の者は「7回は少なく、授業の内容の割には時間が短く、ペースが速かった。内容把握が大変。短時間で大急ぎでやった感じ。もう少しじっくり勉強するともっと面白い授業になる。復習するためのノート取りができるくらいの余裕が欲しい。資料をもう少し長く見たい」という問題を指摘する意見が多かった。

後述する教師の授業技術とあいまって、次の項目への進み方が早くなり、説明も短くなり、学生の「せかされている感じ」「説明についていくのに精一杯」「ノートを取る余裕もない」という感じを引き起こしている。

短い期間で、多くの内容をこなすことは、「もっと勉強したい」という動機づけにはなったとしても、学習成果は低い。

演習は楽しいが、時間を必要とし、実際行ってみて教師自身も時間不足を痛感した。内容(講義7項目、演習5項目)をこなすには、7回は短く、

学習目標に挙げた内容であればもっと長い時間が必要であり、逆に7回で行うためには内容をもっと精選すべきである。

#### 4. 演習を行う上での問題

80名近くの学生数で一度に演習をするには、座席の移動・発表等に時間がかかるため、現在の講義室では効果的なグループワークを進めにくいという問題がある。大教室（150人から200人くらい収容できる部屋）があるとよいと思う。

### 2. 授業内容の評価

#### 1. コミュニケーション論内容の直接的な学び

コミュニケーション論の学習目標を達成したと表明している者は14名であったが、ほとんどの学生は、今までにコミュニケーション論を学ぶという経験はなかったため、受講前から興味関心が高かったが、学習してみて大変興味深く学んだという感想が多かった。

本授業の成果として強く印象に残っている具体的な内容は、コミュニケーションの構造・過程、人間関係や心の支え・相互理解の基本であるというコミュニケーションの意義、よいコミュニケーションのための場所・距離・声・表情などの要素、日常会話にもいろいろなコミュニケーションの取り方があることなどであり、コミュニケーション論の奥深さや意義・重要性を学び、コミュニケーションを改めて深く考える機会になっている。またエゴグラム分析で自己の性格傾向を捉えたことは、新鮮な驚きを与えたようである。

授業後調査で、興味深かった講義内容を3項目選択させたところ、上位3項目は演習「二人の会

話」、演習「自分の会話分析」ならびに演習「1日を100円で暮らす方法」の演習であった（図2参照）。

これらの演習では、体験的にコミュニケーションの相互作用の意義、何気ない日常会話を記録分析することによって自分の傾向を洞察すること、グループダイナミクスの楽しさと難しさが学びになっていることが捉えられた。

#### 2. 理解が難しかった内容

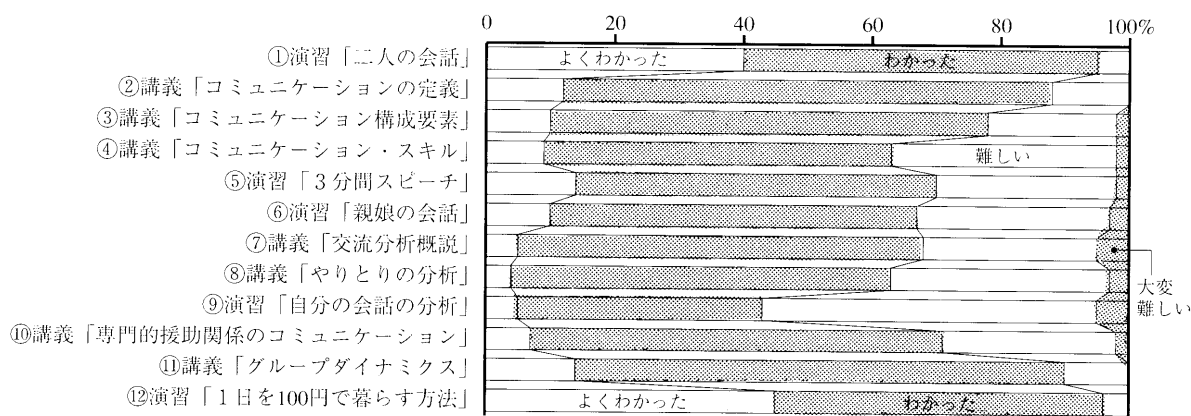
興味ある内容であっても学生のレディネスに対応して理解できるレベルであったかどうかの視点で、学生の反応を分析してみる。

授業項目別に理解できたかどうかの主観的な自己評価では（図1参照）「よくわかった」とする者が多い内容は、演習「1日を100円で暮らす方法」や演習「二人の会話」であった。

「難しい」が最も多いのは、演習「自分の会話の分析」と講義「やりとりの分析」であった。「会話の分析」は、家族や友人との会話のプロセスを記録し、その時の自分の自我状態を交流分析のP（親の自我）・A（大人の自我）・C（子どもの自我）で分析し、自分の傾向を捉えるというものであったが、交流分析論についての教師の説明不足と学生の理解不足が相乗して、成果が上がらなかったものと考えられる。

講義「コミュニケーション・スキル」と講義「専門的援助関係におけるコミュニケーション」、ロールプレイの「親娘の会話」も、「難しい」が多かった項目である。その理由は、講義は説明する時間が充分でなかったためであり、ロールプレイは、学生に突然指名したためと演技者の声が小

図1 授業項目別の理解度



さかたり会話が進まず、スムーズに展開しなかったことに原因している。

### 3. 今後の学習への動機づけになった内容

授業前調査では、コミュニケーションは難しいもの、自分はコミュニケーションは苦手と思っている者が多かったが、授業後調査では、会話することが楽しくなり、コミュニケーションがとりやすくなったり、日常のコミュニケーションを意識することが多くなったという変化あるいは授業の効果を述べている者が多かった。

授業後調査の感想で多く述べられていたことは、「コミュニケーションは日常生活においても、看護場面でも人間関係の重要な基本であるということから、この学習を日常生活に役立てたい、あるいは、患者に信頼される看護婦としてコミュニケーションできるようになりたい」ということであった。その為に本を読む、心理学の勉強をしたい、知識を深めたい、機会があればあらためて人間関係の勉強をしたいなど、今後の学習への意欲を表明している者が多かった。

授業後調査で、今後学びたい内容の選択で多かった項目(図3)は講義「専門的援助関係のコミュニケーション」と、講義「コミュニケーション・スキル」、演習「自分の会話の分析」ならび

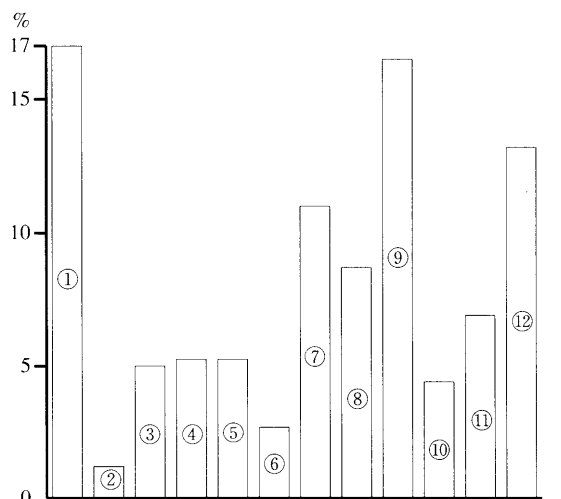
に講義「交流分析概説」、演習「やりとりの分析」である。

講義「専門的援助関係におけるコミュニケーション」は、精神看護やカウンセリングで用いられるコミュニケーション・スキルの要点を抜粋した資料を読み上げるだけで、詳しい説明はしなかったが、これからの学習を予見させたためか、数名の学生は「専門的援助関係に一番興味がある。もっと深く学びたい」と、専門的学習への導入となった。講義「やりとりの分析」やエゴグラム分析は、自己を知る方法として大いに興味をもつものであると同時に、さらにもっと深く学びたいという意欲をもたせた。

演習「自分の会話の分析」は、教師自身もその指導方法を十分に熟知しないで指導した結果として学生に不消化をもたらしたもので、教師自身反省した内容であった。しかし、講義「コミュニケーション・スキル」を学んだ後であり、自分を磨く基本的な方法であるため、今後の学習への意欲を起こさせたと言える。

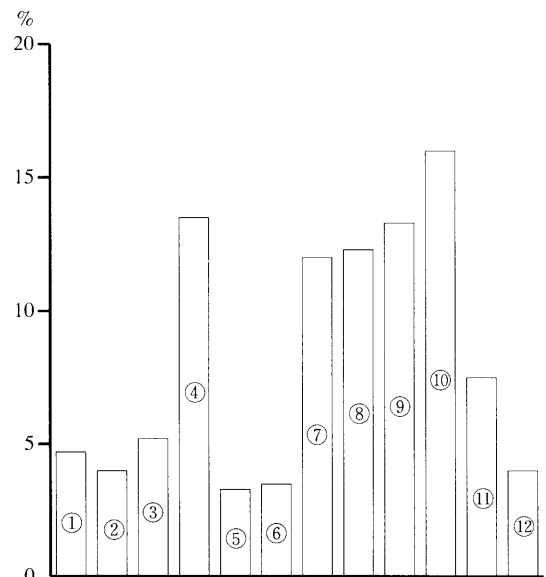
これらはいずれも専門的理論体系があり、理解すること自体が難しい内容であり、短時間では学習が深まらないのは当然であろう。しかし、興味を持たせ、「学び足りない」という飢餓感、こ

図2 興味があった項目



- ① 演習「二人の会話」
- ② 講義「コミュニケーションの定義」
- ③ 講義「コミュニケーション構成要素」
- ④ 講義「コミュニケーション・スキル」
- ⑤ 演習「3分間スピーチ」
- ⑥ 演習「親娘の会話」

図3 もっと学習したい項目



- ⑦ 講義「交流分析概説」
- ⑧ 講義「やりとりの分析」
- ⑨ 演習「自分の会話の分析」
- ⑩ 講義「専門的援助関係のコミュニケーション」
- ⑪ 講義「グループダイナミクス」
- ⑫ 演習「1日を100円で暮らす方法」

れからの学習意欲を喚起するとも言える。ただし、どのような場面で必要になるか、どのような科目で学ぶかなどの示唆を与えたり、文献や学び方を示して、きちんと学習を方向づけることも必要である。

手話か点字を学生の中に学びたい」という意見があったが、これは、講義「コミュニケーションの構成要素」の中の伝達手段の障害の場合として、手話や点字を紹介したことがきっかけになったものである。併設している介護福祉学科には手話の科目が存在するし、総じて本学の学生はボランティア活動や社会福祉に興味があるので、課外活動などで、このようなコミュニケーション手段を学ぶ機会を提供するとよいだろう。

### 3. 教材に関する評価

#### 1. OHPの使用

授業後調査では、OHPを使ったことを37名が「よかった」「分かりやすかった」と肯定的に評価している。視覚的教材としてのOHPは、「印象深く」、講義内容を「具体的に」「理解しやすかった」とのべている。

#### 2. 講義概要と資料プリント配布

次に多いのは、毎回配布した講義概要と資料について33名が肯定的な記述をしていた。資料は「講義を理解しやすい」「講義に集中できる」「看護や実践の場で役に立つ」等の理由を挙げている。

また、「参考文献を紹介したことはよかった」と8名が述べている。「後で理解を深めることができる」「自己学習に役立つ」「図書館にある文献が挙げられており、後で調べることができてよかった」という理由であった。参考文献紹介は、学習の補足、学習意欲の喚起のために当然すべきことであるが、学生が入手しやすい文献・資料を紹介したことがよかったのであろう。

#### 3. コミュニケーションペーパーの活用

授業終了時に記入・提出した「コミュニケーションペーパー」もよかったと4名が書いている。これは「授業の内容を整理し、感想を書くことで自分が何を感じ、勉強になったかを理解できた。さらに次の授業の初めに疑問・質問に回答をしたことで、理解不足を補うことができた」からである。

元々、コミュニケーションペーパーは「授業は学生と教師のコミュニケーションのもとに成り立つ」という考えから実行したものであったが、結

果として予想以上に学生の反応を把握できた。それは教師の授業の適否をストレートに反映しており、また教師自身の自己評価とも相関していたので、毎回の授業評価のためには有効な情報となり、次の授業の計画修正に役立った。

またコミュニケーションペーパーは「出席カード」としても活用したので、出欠確認の方法として時間の節約にもなった。ただし、学生の名前と顔の照合ができないので、別の方法も考えるべきであろう。

#### 4. 教材の作り方・使い方での問題点

「OHPの絵・文字が小さくて見にくかった」が7名、「もっとゆっくり見たい。時間が短い」が4名、「OHPは室内を暗くするため眠くなってしまう」「OHPやAVの使い方がスムーズでなかった」等が挙げられた。

AV器機の使い方に馴れていなかったこと、OHPの作り方等は反省すべき事である。

授業後調査に「あまり物を使わず人間対人間でやりたい」という意見があったが、視聴覚教材を用いる教授法は、教師と学生間を間接的な希薄な関係にすることを指していると思われ、もっと学生との直接的な関係、例えば発問と応答、あるいは演習のような直接的会話などを教授手段とすべきという示唆を与えてくれたと受けとめたい。

#### 4. 教師の授業技術

授業後調査で最も多かったのは、教師のオーラルな技術に関する意見であった。「声は大きくマイクもあって聞き取りやすいが、口調が早いため、説明を理解したり、思考を整理するのに困難である。しかも、板書がないので、口頭だけの説明では理解できない時があった」とする指摘が多かった。

「講義のポイントを板書して欲しい」「講義/説明のしかた・発問が理解できない場合もある」という意見、「宿題を出したこと、家で考えてくる時間を与えたのはよかった」「わかりにくかった所を次の講義で説明したので理解できた」なども散見された。

これらは読みとり方によっては、学生の受け身の姿勢と解釈することもできるが、教師の改善への率直な指摘ととるべきであろう。

オーラル技術のうちの「早口」は、教師の性格に由来する特徴で、なかなか修正できない欠点であることを十分自覚しているが、「少しゆっくり

話す」ことを常に意識する努力が必要である。

また、説明や質問の意味がわかるように、言い換えたり具体的な例を示すなどの発問の工夫、OHPと板書の併用など、わかりやすい授業になるように改善しなければならない。

同時に学生の「自ら考える」という主体的な姿勢作りも必要で、あらゆる機会を通して訓練したいことである。

「教師が明るく元気、熱心、てきぱきしてよかった、一生懸命」という感想は、教師にとっては肯定的なフィードバックになり、教授技術の不十分なところを改善しようという努力向上への意欲を引き出してくれ、励みになった。

## V. 「コミュニケーション論」授業の今後の課題

### 1. 授業の内容と時間数、授業時期に関して

「コミュニケーション論」は、一般に社会学の一分野として、マスコミ論などの社会事象の理論的解釈を学習することが多い。本授業では「コミュニケーション」は理論というより実践的なものであり、よりよい人間関係を築くための技術として学ぶことを意図した点では、それなりの成果があったと評価できよう。

学習目標とした「コミュニケーション理論の基礎的理解」「自己分析」「他者との関係の分析」「グループダイナミクスを発展させる方法」はいずれも、基礎的レベルでは学習できたと思われる。しかし、学生同士がもっと知り合っている時期であれば、別の演習の方法を工夫することによって、学習はもっと深められるだろう。

「会話分析」は実際的にはほとんど成果を見なかったが、今後精神看護学や臨床実習で、「プロセスレコードの分析」で訓練してほしい内容である。

本授業を「話し方教室」にはならないように意識したが、一年次早々、7回で効果を上げるには、もっと内容の精選と方法の工夫が必要である。専門的に学習するには時期は早すぎ、時間は短い。今後カリキュラム上、内容と時期の検討が必要である。

計画では予定した「アサーティブコミュニケーション」は、授業時間不足と授業方法の検討不足のために実施しなかった。論理的思考とその表現、あるいは好ましい人間関係の取り方と関連させて、看護学の授業の中でも必要な内容であろうと考えられる。今後何らかの形で学習できるようにした

い。

### 2. 授業内容とカリキュラム上の位置づけとの関連

本科目は「専門基礎科目」に位置づけられているが、内容的には人間関係論であり、基礎看護学の人間関係技法の基礎編に当たる。本来ならば必須科目として全員に学習させたい内容である。カリキュラム改正の折には、基礎科目として「人間関係論とその技法」という技術論に位置づけるべきであると考ええる。

特に、「専門的援助関係におけるコミュニケーション」は、人間関係を基盤とする看護では必須の学習事項である。それは基礎看護学で学習されるものと考え、本授業では、その導入として6回目に取り入れたが、十分な時間がなく入門で終わった。

いづれ臨床場面で出会う病者・心理的問題をもったクライアント・視聴覚障害者などを対象としたコミュニケーションの実際の技術（カウンセリング技法も含む）は、看護方法論で深めることが是非とも必要である。専門基礎と専門科目であるならば、効果的な授業とするために十分に連携をもち事前の密な協議が必要である。

### おわりに

学習目標の達成度は、「コミュニケーション論」の認知的理解だけではなく、実践へ反映されるものであるため、一概には評価できなかった。しかし、学習意欲の喚起という「向上目標・体験目標」は達成できたと考えられる。授業の構成や展開ならびに教材や教師の教授技術については多くの改善点が示唆された。

本稿の授業研究はやや総花的になってしまった。西之園<sup>(2)</sup>は「授業は絶え間なく変化するダイナミックな、学習者と教師のコミュニケーション過程である」と言っている。学生と教師のコミュニケーション過程の分析や、藤岡<sup>(3)</sup>が提唱する教師の「私的言語」による内観的分析は、教育技術向上のための今後の重要な課題として残されている。

看護職のための「コミュニケーション論」の学習以前に、人間作りのための「コミュニケーション論」でありたいというのが筆者の願いである。授業そのものもコミュニケーションであり、あらゆる日常生活の場面がコミュニケーションで成り立っている。「授業」というフォーマルな教育だ



けでなく、日常の学生と教師、学生同士、教師同士の日常的なふれあい、関わり方という、インフォーマルな関係の中にも教育は存在すると捉えて、日常の関係を大切にしたい。

本学の「人道」という教育理念は、端的に言えば「人を大切にする」という日常のコミュニケーションの中に実践されることである。「話し方・聞き方のスキル」以前に、「互いに大切にしよう」関係の中で、本学の教育の使命を果たしたいものである。

授業中、ビデオ撮影や授業展開にお手伝いただいた奥山講師、大高助手ならびに参観された先生方に感謝します。

#### 引用文献

1. 中村次郎編著『授業研究をどう進めるか』東洋館出版社 1987、p.12
2. 教育技術研究会編『教育の方法と技術』ぎょうせい 1993、p.156
3. 前掲書2) p.287

#### 参考文献

1. E. ヘイン 助川尚子訳『看護とコミュニケーション』メディカルサイエンスインターナショナル 1983
2. 林進『コミュニケーション論』有斐閣 1988
3. 教育技術研究会編『教育実習ハンドブック』ぎょうせい 1993
4. 松本孚『看護教育における「コミュニケーション」の授業方法と位置づけ』文光堂 QUALITY NURSING Vol.2 No.6 1996
5. ネルソン・ジョーンズ、相川充訳『思いやりの人間関係スキル』誠信書房 1993
7. 諏訪茂樹『コミュニケーションと人間関係』建帛社 1995
6. 白井幸子『看護にいかす交流分析』医学書院 1983
7. 滝島紀子『看護教育における「コミュニケーション」の授業計画と展開』文光堂,QUALITY NURSING, Vol.2 No.6,1996